

高次元の分岐について

東大理 加藤和也

代数幾何と類体論は異質なものであるゆえに、この二つのものかうまくつなかる時、代数幾何に全く新しい成果を生むことが可能なのではないか、ということを書きたい。

類体論の考え方から得られる、分岐の激しさをあらわす "swan conductor divisor", "swan conductor 0-cycle class" を用いて、 ℓ 進層の Riemann-Roch という代数幾何の問題を考えることかてきることと述べる。また ℓ 進層と ℓ 加群の深い類似を探ることか、類体論的考え方によって可能になることも述べたい。

§1. 類体論

古典的類体論の復習する。体 k に対し、 k^{ab} を k の最大アーベル拡大とする。ガロア理論により、 k の有限次アーベル拡大は $\text{Gal}(k^{ab}/k)$ の開部分群と 1 対 1 に対応するので、 $\text{Gal}(k^{ab}/k)$

を知ることは k のアーベル拡大の様子を知ることになる。
 特別な体 k については $\text{Gal}(k^{ab}/k)$ が別の群で記述され、 k の
 アーベル拡大の様子がよくわかるというのが、類体論の主内
 容である。

以下 §1 では、 K を代数体とする。

(1) 局所類体論の主定理 v を K の素点とし、 K_v を K の
 v における局所体とする。この時 ほぼ同型に近い標準準同型

$$K_v^\times \rightarrow \text{Gal}(K_v^{ab}/K_v)$$

が存在する。

(2) 大域類体論の主定理 ほぼ同型に近い標準準同型

$$(\prod_v K_v^\times)/K^\times \rightarrow \text{Gal}(K^{ab}/K)$$

が存在する。ここに v は K のすべての素点を走り、 $(\prod_v K_v^\times)/K^\times$
 は K の idele 類群をあらわす。

(1) (2) の関係は、可換図式

$$\begin{array}{ccc} K_v^\times & \rightarrow & \text{Gal}(K_v^{ab}/K_v) \\ \downarrow & & \downarrow \text{自然} \\ (\prod_v K_v^\times)/K^\times & \rightarrow & \text{Gal}(K^{ab}/K) \end{array}$$

で与えられる。

§2. 分岐理論の大要.

(1) 代数体における古典的理論. K を代数体, $\bar{K}$ をその代数閉包 $\rho: \text{Gal}(\bar{K}/K) \rightarrow \text{GL}_n(\mathbb{C})$ を連続表現とすると, K の整数環 O_K の各素 ideal $\mathfrak{p} \neq (0)$ に対し, ρ の $\mathfrak{p}$ における conductor と呼ばれる整数 ≥ 0 が定まり, ρ の $\mathfrak{p}$ における分岐の激しさをあらわす. そして重要な役割を演ずる. 例えは, 各 $\mathfrak{p}$ に対して conductor を $m(\mathfrak{p})$ とおくと, $\prod_{\mathfrak{p}} N(\mathfrak{p})^{m(\mathfrak{p})}$ ($N(\mathfrak{p})$ は $\mathfrak{p}$ のノルム) は $\mathfrak{p}$ の L 函数 $L(s, \rho)$ の函数等式にあらわれる.

conductor には Artin conductor と Swan conductor と二つある (両者ほとんど似たようなものである) が, 以下では主に Swan conductor とその一般化を考えていく.

$n = 1$ つまり $\rho: \text{Gal}(\bar{K}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ の場合には, conductor は, 類体論によってあらわされる. ρ は $\text{Gal}(\bar{K}/K)/(\text{この交換子群の閉包}) = \text{Gal}(K^{ab}/K)$ を至由するから, 各 $\mathfrak{p}$ に対し ($\mathfrak{p} \in K$ の素点と考えて) 類体論 (§1) により

$$K_p^\times \rightarrow \text{Gal}(K^{ab}/K) \xrightarrow{\rho} \mathbb{C}^\times$$

を導く. そして, ρ の $\mathfrak{p}$ における Swan conductor $\text{sw}_{\mathfrak{p}}(\rho)$ は, この合成写像が $K_p^\times$ 中の第 $(i+1)$ 単数群を零化するような, 最小の整数 $i \geq 0$ である. (K_p は完備離散付値体で, 各 $i \geq 1$ に対し その第 i 単数群が, $\{a \in K_p^\times; \text{ord}_{K_p}(a-1) \geq i\}$ と定義される. ここに ord_{K_p} は K_p の正規加法付値)

(2) conductor divisor.

(1)を一般化して考えれば、一般に X を正規 scheme K をその函数体とし (上の(1)は K が代数体, $X = \text{Spec}(O_K)$ の場合である), K^{sep} を K の分離閉包 $\rho: \text{Gal}(K^{\text{sep}}/K) \rightarrow \text{GL}_n(\mathbb{C})$ を連続表現とする時, X の各点 ρ に対して (ρ を高さ1の点に限っても) conductor と呼ばれる整数 ≥ 0 が定まり重要な役割を演ずるであろうかという疑問がある. 現在筆者は, そのような conductor は一般に存在しないと考える. しかしながら,

主結果 1. ρ が高さ1の点, $n=1$ (つまり ρ は

$\text{Gal}(K^{\text{ab}}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$) の時, 類体論的な考え方によって良い conductor が定義される. (ρ が高さ1でも $n \geq 2$ では一般にはよい conductor が定義できないと考える.)

これにより, $n=1$ の時, ρ における ρ の conductor を $m(\rho)$ とおけば, X 上に "conductor divisor"

$$\sum_{\substack{\rho \in X \\ \rho: \text{高さ1}}} m(\rho) \cdot \rho$$

が定まることになる.

(3) $\mathcal{O}$ 加群との類似をたどること.

$\mathcal{O}$ 加群の理論では, variety X 上の $\mathcal{O}$ 加群に対し, その singularity の様子をあらわす "characteristic cycle" が, X の cotangent bundle の上に定義される. この類似として,

主結果 2. (2) の X, ρ 但し $n=1$, に対し 適当な条件のもとで ρ の characteristic cycle が定義される. 定義には (2) にのべた ρ の conductor divisor が使われる.

(4) 大域公式.

$\mathcal{D}$ 加群の理論では, 「characteristic cycle」と「cotangent bundle の 0-section」との intersection は, X 上の重要な 0-cycle class を与える. この 0-cycle class は重要で, その degree は, Dubson-柏原の公式によれば, $\mathcal{D}$ 加群の de Rham complex の Euler-Poincaré 標数に一致する. この Dubson-柏原の公式は singularity という local な状況と, Euler-Poincaré 標数という global なものを結びつける公式である.

主結果 3. (2) の X, ρ , 但し $n=1$ に対し 適当な条件のもとで, ρ の 「characteristic cycle」と「0-section」の intersection として 重要な 0-cycle class が定義される. (conductor 0-cycle class と呼ぶ.)

主結果 4. conductor 0-cycle class は, 分岐という local な状況と, 大域的なもの (1 進層の Euler-Poincaré 標数, L 函数の函数等式) を結びつける いろいろの公式にあらわれる.

§3 大域公式.

§2 の主結果 3 の conductor 0-cycle class はどのような群の

元として定義されるものか今少しくわしく述べてから、§2の主結果4に述べる所の大域公式を2つ与える。

(1) X を正規 scheme (連結と仮定する), U をその dense open set, K をその函数体とする。

$$E = \{x \in X; x \notin U, \text{ 剰余体 } \kappa(x) \text{ の標数 } \neq 0\}$$

とおく。 E は X の閉部分集合であるか、これを reduced scheme と見る。次を仮定する

(*) E は、正標数の完全体上の有限型 scheme の disjoint union である。

この仮定は弱い仮定で、たとえば X が $\mathbb{Z}$ や 完全 体の上に有限型であれば、必ずみたされる。

§2主結果3にいう conductor 0-cycle class ($c_{X,U,f}$ と書く) は $CH_0(E)$ の元として定義されるべきものである (CH_0 は 0-cycle の Chow 群) 実際には筆者は $\dim(X) \leq 2$ の時のみ $c_{X,U,f}$ を定義した。(もっと高次元でも、定義の plan は全く同じように存在するのだが。そして定義のできる場合もあるのだが、plan の中に一般にはまだ実行できない所が $\dim \geq 3$ では存在する。)

古典的な場合にはどうなるかという。 K : 代数体,

$X = \text{Spec}(O_K)$, $U = X - \{p_1, \dots, p_r\}$ ($p_1, \dots, p_r$ は O_K の相異なる素 ideal $\neq (0)$) の時には, $E = \{p_1, \dots, p_r\}$,

$$CH_0(E) = \underbrace{\mathbb{Z} \oplus \cdots \oplus \mathbb{Z}}_{r \text{ 個}}$$

であり, この場合 $C_{X,U,f}$ の ρ_i 成分 $\in \mathbb{Z}$ は,

— (f の ρ_i での swan conductor)

になる.

このように conductor 0-cycle class は, X の上の f が分岐する部分の中の, 正標数の部分に, 住んでいるものである.

(2) ℓ 進層の Riemann-Roch

k を代数閉体, X を k 上の smooth proper variety, U を X の dense open set, ℓ を k の標数と異なる素数とし, $\mathcal{F}$ を U 上の smooth $\overline{\mathbb{Q}_\ell}$ -sheaf ($\overline{\mathbb{Q}_\ell}$ は $\mathbb{Q}_\ell$ の代数閉包) とする. étale cohomology の次への交代和

$$\chi(U, \mathcal{F}) \stackrel{\text{def}}{=} \sum_i (-1)^i \dim_{\overline{\mathbb{Q}_\ell}} H^i(U_{\text{ét}}, \mathcal{F})$$

を $\mathcal{F}$ の Euler-Poincaré 標数と呼ぶ. $\mathcal{F} = \overline{\mathbb{Q}_\ell}$ の時, これは U 自身の Euler-Poincaré 標数と呼ばれ $\chi(U)$ と書かれる.

例. k の標数 $= 0$ ならば

$$\chi(U, \mathcal{F}) = \text{rank}(\mathcal{F}) \cdot \chi(U)$$

問題は k の標数が $p > 0$ の場合であって,

$$\chi(U, \mathcal{F}) = \text{rank}(\mathcal{F}) \cdot \chi(U) + (?)$$

と書くと $(?)$ の所は, $\mathcal{F}$ の wild な分岐 (" k の標数 p でわりきれような分岐") に関係すると考えられる. この $(?)$ をあら

order の

わす公式は, $\dim(X)=1$ な S Grothendieck-Ogg-Shafarevich の公式 [] が知られており, $\dim(X)=2$ でも, 或る条件のもとで Laumon [3] (構想は Deligne), 斎藤 [4] に公式が与えられているが, 一般には予想公式さえ与えられておらない. 公式が予想され証明されたならばそれは $\mathbb{A}^1$ 進層の Riemann-Roch と呼ばれるべきものである. 予想を作る困難は, 高次元の scheme 上に生ずる分岐が難解なることである. 昔からの連接層の Riemann-Roch 公式のように, $X(U, \mathcal{F})$ を $\mathcal{F}$ の "Chern class" のようなもので書こうとしても, まずその第 1 Chern class さえ定義できない. 第 1 Chern class は $\mathcal{F}$ の "conductor divisor" がそれにあたるとはすであるか "conductor divisor" は一般に定義できないと思われるのである. すなわち, K を X の函数体とすると, $\mathcal{F}$ は

$$\rho: \text{Gal}(K^{\text{sep}}/K) \rightarrow \text{GL}_n(\overline{\mathbb{Q}}_p)$$

で U 上不分岐なものと対応する ($n = \text{rank}(\mathcal{F})$) が, ρ の conductor divisor は §2 (2) に述べたように, 一般には定義できないと考えられるのである. しかしながら, $n=1$ の場合には conductor divisor が存在し (§2 (2), そこでは $\overline{\mathbb{Q}}_p^*$ でなく $\mathbb{Q}^*$ への表現も考えているが, 同じ定義が成立する), そしてその conductor divisor をもとに conductor 0-cycle class $c_{X,U,\rho}$ が $\dim(X) \leq 2$ なら常に, $\dim(X) \geq 3$ でもあとの $\mathbb{A}^1$ "clean" の仮定のもとでなら定義される (U が fix されたとき適当に X をと

りかえると "clean" 条件はみたされると予想される)。

予想 $\text{rank}(\mathcal{F}) = 1$ のとき,

$$\chi(U, \mathcal{F}) = \chi(U) + \deg(c_{X,U,\mathcal{F}}).$$

($\deg$ は 0-cycle class の degree)

定理 予想は $\dim(X) \leq 2$ なら成立する。

幾層の Riemann-Roch は純粹に代数幾何の問題であるが、
 連接層の Riemann-Roch とちがって「分岐」に深くかわり、
 古典的な、代数的整数論の分岐論がそうであるように、類体
 論と深くかわるはずであり、こういう代数幾何と類体論の
 交叉のテーマは筆者にとってロマンを感じる事柄である。

(3) Cohomology の conductor, Jacobi 和

k を代数体, $\mathcal{O}_k$ もその整数環, X を $\mathcal{O}_k$ 上の ^{proper} flat 有限型 scheme
 とし, 正則かつ連結なものとする. U を X の dense open set,

K を X の函数体. ℓ : 素数, $\mathcal{F}$ を U 上の smooth

$\mathbb{Q}_\ell$ -sheaf, $\rho : \text{Gal}(\bar{K}/K) \rightarrow \text{GL}_n(\mathbb{Q}_\ell)$ を $\mathcal{F}$ に対応する

U 上不分岐な表現とする. étale cohomology 群 $H_{\text{et}}^i(U_{\bar{k}}, \mathcal{F})$

($U_{\bar{k}} = U \otimes_{\mathcal{O}_k} \bar{k}$) には, $\text{Gal}(\bar{k}/k)$ が作用するが, この,

$\text{Gal}(\bar{K}/K)$ の表現 ρ の分岐と, cohomology への $\text{Gal}(\bar{k}/k)$ の表現の
 分岐の関係を, 記述するのが目標である。

予想 $n=1$ とする. v を k の有限素点で $v \nmid \ell$ なるもの
 とすると,

$$\mathrm{sw}_v H_{\mathrm{et}}^i(U_{\bar{k}}, \mathcal{F}) = \mathrm{sw}_v H_{\mathrm{et}}^i(U_{\bar{k}}, \overline{\mathbb{Q}}_\ell) - \deg(c_{X, U', \mathcal{F}})$$

ここに $\mathrm{sw}_v H_{\mathrm{et}}^i(U_{\bar{k}}, \mathcal{F})$ は $\mathrm{Gal}(\bar{k}/k)$ の表現 $H_{\mathrm{et}}^i(U_{\bar{k}}, \mathcal{F})$ の v における swan conductor (§2 (1)). ここで $\mathbb{C}$ 上の表現について述べたが $v \nmid \ell$ なら $\overline{\mathbb{Q}}_\ell$ 上の表現にも v における swan conductor が定義できる. ここで v は $\mathbb{O}_k$ の素 ideal と同一視した) の i に関する交代和 $\sum_i (-1)^i \mathrm{sw}_v H_{\mathrm{et}}^i(U_{\bar{k}}, \mathcal{F})$ である. また, U' は U から v 上にある部分を除いたもの.

定理 予想は $\dim(X) \leq 2$ なら成立する.

例. $X = \mathbb{P}_{\mathbb{O}_k}^1$, k は 1 の原始 n 乗根を含むとし, U は, $X \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{Z}[\frac{1}{n}, \frac{1}{\ell}]$ から, divisor " $t=0$ ", " $t=1$ ", " $t=\infty$ " をぬいたもの (t は $\mathbb{P}^1$ 上の標準座標関数) とする. $K = k(t)$ であるか. 整数 a, e をとり,

$$\alpha = t^{\frac{a}{n}} (1-t)^{\frac{e}{n}}$$

を $\bar{K}$ の中にとり $\mathcal{F}$ とし (a, e は depend する),

$$\mathrm{Gal}(\bar{K}/K) \rightarrow \overline{\mathbb{Q}}_\ell^\times : \sigma \mapsto \sigma(\alpha)/\alpha$$

をとると, $\mathcal{F}$ に対応する $\mathcal{F}$ について $H^1(U_{\bar{K}}, \mathcal{F})$ は $\mathrm{Gal}(\bar{k}/k)$ の Jacobi 和表現と呼ばれる 1 次元表現になる. Jacobi 和表現といわれる理由は, $v \nmid n$, $v \nmid \ell$ ならば この表現は v で不分岐で v の frobenius 置換の $\overline{\mathbb{Q}}_\ell^\times$ における像が「Jacobi 和」に一致するかである. $v \mid n$, $v \nmid \ell$ ならば $\frac{1}{\mathcal{F}}$ による分岐がおこりうるか $\mathrm{sw}_v H^1(U_{\bar{K}}, \mathcal{F})$

$k_n = K$ なるものが与えられていることをいう。 n 次元局所類体論によれば、ほぼ同型に近い標準準同型

$$K_n^M(K) \rightarrow \text{Gal}(K^{ab}/K)$$

が存在する (K_n^M は Milnor の K 群) ([1])。 $\rho: \text{Gal}(K^{ab}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ に対しその Swan conductor を ρ が $K_n^M(K)$ の第 $(i+1)$ 単数群を消す最小の整数 $i \geq 0$ として定義する。 ここに、 $i \geq 1$ に対し完備離散付値体 K の $K_n^M(K)$ の第 i 単数群 ($U^i K_n^M(K)$ と書く) とは、

$$\{a_1, \dots, a_n\} \quad a_1, \dots, a_n \in K^\times, \text{ord}_K(a_i - 1) \geq i$$

の形の symbol で生成される $K_n^M(K)$ の部分群。

2°. A の剰余体が素体上有限生成な時。 この時 K の拡大体である完備離散付値体 K' で、 K の素元は K' でも素元、 K' の剰余体はある $n \geq 0$ について n 次元局所体でかつ K の剰余体の分岐拡大となるものが存在する。 A における Swan conductor を $A' = (K' \text{ の付値環}) \wedge$ といって 1° によって定義する。 これは K' のとり方によらないことが言える

3°. 一般に A は、剰余体が素体上有限生成な完備離散付値環の有限順極限 $\varinjlim A_i$ の完備化としてあらわされる。 そして $\rho: \text{Gal}(K^{ab}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ は十分大きい i について A_i において定義される。 2° により、十分大きい i について Swan conductor を定義すれば、それは十分大きい i について一定となり、こ

れを Swan conductor と定義するのである.

(2) Characteristic cycle.

Characteristic cycle は "logarithmic pole 的 cotangent bundle" の上の cycle であるので, まずこの "logarithmic pole 的 ----" を定義する. X を正則 scheme で D をその上の normal crossing な reduced divisor とする. $\mathcal{O}_X$ 加群層 $\Omega_X^1(\log D)$ を次のように定義する. $U = X - D$, $j: U \rightarrow X$ を inclusion とし $\mathcal{O}_X$ 加群 $\Omega_{X/\mathbb{Z}}^1$ と, 記号 $d\log(f)$ $f \in j_*\mathcal{O}_U^\times$ で生成される自由 $\mathcal{O}_X$ 加群の, 直和を, 関係式 " $d\log(fg) = d\log(f) + d\log(g)$ ", " $f \in \mathcal{O}_X \cap j_*\mathcal{O}_U^\times$ ならば $d\log(f)$ は $\Omega_{X/\mathbb{Z}}^1$ の元 df に一致" によってできる $\mathcal{O}_X$ 加群を, $\Omega_X^1(\log D)$ であると定義する. X が標数 $p > 0$ の完全体 k 上の smooth scheme なら

$$\Omega_X^1(\log D) = \text{通常の } \Omega_{X/k}^1(\log D) \subset j_*\Omega_{U/k}^1$$

となる.

仮定として

(*) X は excellent, 連結で, D の正標数の既約成分は, 正標数の完全体上の有限型 scheme である

とする. この仮定は 例えは X が $\mathbb{Z}$ (連結) や正標数の完全体上の有限型ならば, 成立する

Proposition: F を D の正標数の既約成分とすると

$$\Omega_X^1(\log D) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F$$

は $\mathcal{O}_F$ 上の $\text{rank dim}(X)$ の locally free sheaf である。

以下 (2) では (*) を仮定し, X の函数体を K とし,

$\rho: \text{Gal}(K^{ab}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ を U 上で不分岐なものとし, ρ の

Swan conductor divisor を $\underline{\text{sw}}(\rho)$ とおく. 次のような概念を順次定義していく必要がある.

1°. refined Swan conductor. F を $\underline{\text{sw}}(\rho)$ の台の既約成分とする (F は正標数となる) と, $\Omega_X^1(\log D)(\underline{\text{sw}}(\rho)) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F$ の

non-zero global section $\text{rsw}_F(\rho)$ が定義される. ここには $(\underline{\text{sw}}(\rho))$ は (refined Swan conductor と呼ぶ.) 可逆層 $\mathcal{O}_X(\underline{\text{sw}}(\rho))$ とのテンソル積を示す. 定義はややこしく, 長くなるので, [2] に書いたことを用いて説明する. $\text{rsw}_F(\rho)$ は F の生成点における stalk で特徴づけられるが, 生成点 p における stalk は, 離散付値環 $\mathcal{O}_{X,p}$ と ρ と $\mathcal{O}_{X,p}$ の素元 π についてきまる [2] p171, 9 行目の $(\alpha, \beta) \in \Omega_{K(p)}^1 \oplus K(p)$ を用いて,

$$\pi^{-n} \otimes (\tilde{\alpha} + \tilde{\beta} d \log(\pi))$$

(n : ρ の p における Swan conductor の値, $\tilde{\alpha}$: α の $\Omega_{X/\mathbb{Z},p}^1$ のもちあげ, $\tilde{\beta}$: β の $\mathcal{O}_{X,p}$ へのもちあげ) と定義される.

refined Swan conductor は高次元局所体を用いて述べることもできるがここでは説明をしない (やはりややこしい話になってしまいますので) か, K を n 次元局所体 ($n \geq 1$),

$\rho: \text{Gal}(K^{ab}/K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ の Swan conductor が $i \geq 1$ とすると, refined Swan conductor とは ρ の導く $U^i K_2(K)/U^{i+1} K_2(K) \rightarrow \mathbb{C}^\times$ の記述である.

2° cleanness. (X, U, ρ) が clean ということの定義は [] に述べたが, これは divisor $\underline{sw}(\rho)$ の台の任意の既約成分 F について, $rsw_F(\rho)$ が local $= \Omega_X^1(\log D)(\underline{sw}(\rho)) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F$ の base の 1 部になることである.

3° characteristic cycle. (X, U, ρ) が clean の時, その "characteristic cycle" を次のように定義する. この時 $rsw_F(\rho)$ は

$$\mathcal{O}_X(-\underline{sw}(\rho)) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F \longrightarrow \Omega_X^1(\log D) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F$$

を induce するが, cleanness から, 左のものは右のものに局所的には直和因子として埋め込まれている. したがって F 上の vector bundle $V(\Omega_X^1(\log D) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F)$ の rank 1 の部分 vector bundle が与えられていることになり, これを $V_{F,\rho}$ と書く. 形式的な和

$$\sum_F \underline{sw}_F(\rho) \cdot V_{F,\rho}$$

($\sum$ に F は $\underline{sw}(\rho)$ の台の既約成分を走り, $\underline{sw}_F(\rho) \in \mathbb{Z}$ は

$\underline{sw}(\rho)$ の F での係数) を (X, U, ρ) の characteristic cycle と呼ぶ.

X が正標数の完全体 k 上 smooth なら, これは $V(\Omega_{X/k}^1(\log D))$

(log pole 的 cotangent bundle) の上の cycle とみなせるが,

これは $V(\Omega_{X/k}^1(\log D))$ の 0-section $[X]$ を加えたものか, $\mathcal{O}^*$ 加群の理論における characteristic cycle の良い類似になる. $\mathcal{O}^*$ 加群論では cotangent bundle を用い, log pole 的 cotangent bundle は用いないが 少し定義を変えれば log pole 的 cotangent bundle 上

に characteristic cycle を定義できる.)

(3) conductor 0-cycle class (X, U, f) を上の §4(2) のとおり (仮定*) をみたす) とし clean とする時, $(-1)^{\dim X} \cdot \text{sw}_F(f) V_{F,f}$ と, $V(\Omega_X^1(\log D) \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_F)$ の 0-section ($\cong F$) の intersection $\in CH_0(F)$ を, $\text{sw}(f)$ の台のすべての既約成分 F について加えることにより,

$$c_{X,U,f} \in CH_0(E) \quad E = D \text{ の正標数部分}$$

が定義される.

次に, (X, U, f) を §3(1) のとおりとする (つまり X の正則性や, cleanliness を仮定しない) この時は, $\dim(X) \leq 2$ なら

$c_{X,U,f}$ は次のように定義される. $f: X' \rightarrow X$ proper birational で $(X', f^{-1}(U), f)$ が §4(2) の仮定をみたしかつ clean であるものが存在することか示せ,

$$c_{X,U,f} = f_* c_{X', f^{-1}(U), f}$$

と置く. これは X' のとり方によらないことが示される.

文献表

[1] K. Kato, A generalization of local class field theory by using K-groups II, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo IA 27, 1980.

[2] K. Kato, 高次元の分岐について (数理解析研究所講究録 609)

[3] G. Laumon, Characteristic d'Euler-Poincaré des faisceaux

constructibles sur une surface, Astérisque 101-102.

[4] S Saito, General fixed point formula for an algebraic surface and the theory of Swan representations for two dimensional local rings to appear in Amer. J. Math.

なお本稿に書きましたことは論文

Class field theory, $\mathcal{D}$ -modules and ramification on higher dimensional schemes

にまとめつもりです。 $\mathcal{D}$ 加群との類似について詳しく述べずに終わってしまいましたか、これについては拙稿「類伴論と $\mathcal{D}$ 加群 (1986年10月の数理解析研・代数解析の集会報告集) にくわしく書きました。終わりの方で本稿が少し乱雑な書き方になりましたこと(時間切れ)をおわびします。